

オスカー・ワイルド作品における「音楽」の表象

なかむら ひとみ
中村 仁美

唯美主義者かつ英国デカダンスの旗手であった、アイルランド出身の作家オスカー・ワイルドと「音楽」との関わりが、これまでに顧みられることは少なかった。本論文は、ワイルドの作品における「音楽」の表象を検証するものであり、異なる主題と研究手法を持った以下の五章によって構成されている。

第一章では、ワイルドの音楽への親しみを明らかにし、文体の音楽性の追求や、ウォルター・ペイターの「すべての芸術は絶えず音楽の状態に憧れる」という金言に同調的であったことをテキストから読み取った。第二章では、ヴィクトリア朝期イングランドの史実を含め、ワイルドのテキストがいかに当時の音楽文化を映し出しているかを記した。とりわけ彼は、フレデリック・ショパンの音楽に償いや魂の浄化を、リヒャルト・ワーグナーの音楽に官能や隠された欲望を見出し、作中に援用している。

第三章と第四章ではワイルド作品に登場する音楽家もしくは音楽愛好家たちと、同時代の言説との関係について考察した。第三章では、音楽とメスメリズムをめぐる言説が『ドリアン・グレイの肖像』のヘンリー卿をはじめ多くの人物によって体現されていることに論及し、『サロメ』の場合は狂気の域に至っていることを指摘した。第四章では視点を変え、ワイルドが描く音楽家を当時のジェンダー・イデオロギーと照合した。そして、彼の作品では「男性は音楽などすべきでない」「女性は家庭内音楽の担い手である」といった、同時代に敷衍した価値観が覆されていることを例証し、それは自身のセクシュアリティにも関係していると論じた。

最終章では、ここまで触れるだけであったワイルドの詩とその音楽的表象について検証した。ワイルドの音楽への憧憬は青年期の詩作にまで遡ることができるが、ギリシャ神話や古典的なイメージを多用した初期詩と異なり、彼の詩における音楽の表象は、1880年代半ばからデカダン調に変化している。しかし、彼が出獄後に著した長編詩『レディング監獄のバラッド』は、自身の悲哀が見事に結晶化し、独創的な魅力を持つ音楽的スペクタクルとなっていると総括した。

学際的関心の高まりとともに、ヴィクトリア朝文学における「音楽」が注目されるなか、ワイルドと音楽との関わりを多角的に考察した本論文は、彼の音楽への憧憬や、音楽的登場人物の造形の特色を明るみにし、作家の新たな一面を提示するものである。